

# 観念論の構造

高橋克也

## 観念論の構造

高橋 克也\*

哲学上のある立場（学説）を自分は採用すると宣言していることと、その立場を本当に実践していることとの間には往々にしてずれがある。他方、ある立場を退けると宣言していながら行動においてはその立場を実践してしまっていることがある。認識論において相対立する「観念論」と「实在論」の二つは、特にこのような「学説」と「態度」のずれが起りやすい思想上の立場である。なぜなら、観念論を学説としては侮蔑しておきながら行動や態度が「観念論」と呼ぶにふさわしい人はいくらでもいるし、逆に、「観念論」の立場からスタートしたと言われる哲学者たちのその狙いが实在論を目指しての知的実践であると言ってよいケースもある。人は観念論をスコラ的議論の結果として採用するというよりも、生き方として観念論を選んだり、陥ったりするものなのである。他方、「实在論」など常識と同じようなものだから誰でも実行している、と簡単に言うこともできない。实在論者として現実と向き合うことは実に難しいことである。

このように、単なる学説としてではなく、人の実践の中で顕わになるような態度や思考様式として見たとき、「観念論」も「实在論」もこれまでの論争史の中で定義されてきたものとはその意味がおおざと異なってくるだろう。ある思想がもつ意味が何かということは、その思想を持つことで人の考え方、行動がどう変容することになるのか、というところから認識されるべきである<sup>1</sup>。この論文では、学説としての観念

論ではなく実践的態度としての観念論とはどのようなものであるかを明らかにし、それとの対比で実践的態度としての实在論（「真の实在論」とも呼ぶことがある）に必要な要素は何か、を論ずる。その過程で、観念論とみなされてきた学説に実際問題があるとすればどのような点か、また、实在論の堅持が実践においてはなぜ難しいか、という問題を検討することになるだろう。本当に实在論を実行している人々にとっては、以下に延べるようなことは、既に分かり切ったことであるかもしれない。しかし、認識論のような、ともすると暇人の議論のように見えかねない哲学論争に実践的な見地から光を当てることは必要である。そして、何よりも私自身への戒めとして、このような前-学術的な考察を行う必要を強く感ずるのである。

### 1 実践上の態度としてみた「観念論」と「实在論」

観念論とは、哲学史では普通、「私の生きているこの世界は私の観念の世界である」とする立場であると説明される。観念とは、意識の内に現われる知覚内容、イメージ、思考内容などの総称である。ドイツの哲学者であれば「観念」の代わりに「表象」と言うだろう。他方、实在論とは、世界は「私」の観念の世界の外に、これとは独立に存在しているとする立場であり、普通、世界は物質の世界であると考え。常識にかなった考え方である。

観念論のような学説を言葉において否定することはたやすい。「物質の存在を疑ったり否定し

\* たかはし・かつや  
埼玉大学教養学部准教授、近代ドイツ・フランス哲学

たりするなんて非常識な考えだ」、「私は物質としてのパンを食べているのであって、観念を食べているのではない」、「ダチョウは砂の中に頭を埋めると敵の姿が見えなくなって安心すると言われるが、観念論者はまるでダチョウだね。自分に見えていないものは存在していないと主張するのであれば。私はダチョウじゃないよ」と。しかし、それにも関わらず、人が実人生における思考・行動において観念論を生きてしまっていることはいくらでもある。都合の悪い現実を見ない、自分の思考を検証しようとしなない。自分がよいと思い込んでいる理論や方法に固執し、それを改める必要を認めない。それこそ例えば、何度戦闘で惨敗しても同じ方法（兵力の逐次投入）を改めようとせず、甚大な人的被害を出しつづけた昭和の戦争における日本軍。実践上の態度として見たとき、これなどはまさに観念論の典型であろう。そして、われわれ個人の日々のものの考え方や現実認識がこれと同じでないという保証はどこにもない。一言で言えば、観念論とは自分の思い込みに対する固執・安住である。

このような例を念頭に置いたとき、実践の見地から見た「観念論」を次のように定義することができる。それは、自分の思考に現実が一致するはずだ、という（根拠なき）信念である。他方、「实在論的態度」は、思考を現実に一致させてゆこうとする態度であると定義できる。こう考えたとき、単に学説としての实在論を肯定し、学説としての観念論を否定することが即、「实在論的態度」の実践を意味するわけではないことが分かる。実際、唯物論という、常識に合った（それゆえ实在論の性格を持った）学説を採用したからといって、その人の態度が観念論を逃れているとは限らない。「自分は神や精神力などではなく、物質だけを当てにしている」と言い、薬を次から次へと買いあさって、それ

に依存する人がいたとしたらどうだろう。また、「物質と経済の法則からして、資本主義は崩壊して共産主義に移行することが必然的である」と検証なしに信じ込む人の態度も、観念論的と呼ぶにふさわしい。思い込みへの執着・安住をやっている間は、唯物論者を自称しても観念論者として生きていることに変わりはないのである。（薬に頼りすぎる人の例に関して一言しておくならば、物質ではなく物理、つまり「理」を相手にすることが本当に地に足のついた唯物論である。）なお、「唯物論」はもともと「唯心論」と対比され、この世界を構成する基本的なものが何であるかに関する、存在論上の一つの立場である。他方、観念論と实在論は認識論上の概念である。マルクス主義者によって「観念論」に「唯物論」が対置されたので、「観念論vs唯物論」という対立図式が頻繁に用いられたが、もともとは土俵の違う概念であることを知っておく必要がある。しかし、唯物論と唯心論も、単に学説としてではなく実践的態度として見なおすことが可能であり、その場合には、唯物論的態度は实在論的態度と一致するであろう。

## 2 観念論に陥る二つの仕方

实在論や唯物論の学説を抱く人が必ずしも实在論的に考え、行動しているとは限らないということを示唆したが、他方、観念論の学説を採った過去の哲学者たちがむしろ真の实在論を追及していた可能性がある、とも述べた。（デカルト、カント、フッサールを私は念頭に置いている。）観念論的アプローチが实在論に通じうるのはなぜだろうか。

それは次のような事情による。人は神ならぬ身であるから、自分の特殊な視点や物の見方という束縛を離れた完全に客観的な視点に立つことができない。それができると思うことは、神

の立場に立っているかのごとき思い上がりであり、実際はやはり自分の思い込みへの固執にすぎない。あるいは既存の権威への盲信である。つまり、客観性を無反省に措定することは現実無視の観念論なのである<sup>2</sup>。だから、自分の思い込みを打破するために、やはり自分自身で見、思考することが不可欠であるという独特の困難があるのだ。その困難を自覚することが实在論への第一歩であるということだ。

誰にとっても、自分に見えているものや自分がそうだと思っているものが、その人にとっての現実である。壁のしみが悪霊の顔に見えている人にとっては、やはり壁のしみは怖いのだし、教科書で言葉として覚えた以上のことを知らない人にとって「クリミア戦争」も「ナイチンゲール」も、戦争と看護婦の漠然とした風景としてイメージされる以上の意義はもたない。インパール作戦を計画した参謀たちが地図の上に線を引くだけで集合や攻撃の時間を決めていたとき、険しい丘陵や沼地は彼らにとって存在していなかった。殿様が、「自分が剣術で皆に勝つのは自分の力量が確かだからだ」と思っているとしたら、たとえ本当は皆が遠慮して手加減しているのだとしても、殿様にとってはやはり自分の思い込みが現実である。単なる皮肉としてではなく、われわれが完全には抜け出すことのできない根本状況としてこうしたことは踏まえておかねばならない。

ヨーロッパ近代の哲学者たちは、「そう見えている」「自分はそう思っている」その内容が本当に真理であるのかどうかを吟味する必要があると考えたわけだが、その場合もはや権威にすることはできない。自分の知覚と思考を通して、思い込みにすぎないかもしれない世界から脱することが可能かどうか、そう問わざるをえなかったゆえんである。これがつまり、単なる「思い（込み）」（doxa, belief, opinion, Meinung,

Glaube）ではなく「認識」（epistēmē, knowledge, connaissance, Erkenntnis）が可能かどうかという問いである。こうして、逆説的なことだが、観念論からのアプローチ——「唯識」的なアプローチと言ってもよい——が却って实在論的態度にいたる可能性を持っているのであり、ある意味では唯物論的な態度にいたる可能性を持つとさえ言えるのだ。

もちろん、過去の哲学者たちの観念論は悪い意味での観念論に墮す危険も常にもっていた。思い込みの外には出られないという諦め、観念の世界がそのまま現実の世界だとして、事実上思い込みの世界に安住するような独断的態度。

このように見てくると、観念論に陥るのに二つの仕方があることが分かる。サルトルがその二つの仕方を巧みに言い表しているので、サルトルの言い方を借りよう。一つは、「現実を主観性のうちに解消すること」であり、もう一つは「客観性のために一切の主観性を否定すること」である<sup>3</sup>。前者は実際に観念論と呼ばれてきた学説が犯しやすい誤りであり、後者は、典型的には自称「唯物論者」が陥る可能性のある誤りである。簡便のため、仰々しいけれどもやはりサルトルの言葉を借りて、前者を「右翼の観念論」、後者を「左翼の観念論」と呼ぶことにする。以下では順次それぞれのタイプの観念論を特徴づけ、それとの対比で实在論の意味を少しずつ追求してゆきたい。

### 3 右翼の観念論（1）——此岸的なものの軽視

#### 3-1 「すべては幻」

観念論と呼ばれてきた学説は、もちろん観念論的態度とこれまで呼んできた問題を生む可能性がある。主観性のうちに現実を解消し、世界は「私」の観念の世界（心の中の世界）である

とするような考えは、観念の外の世界の存在を疑う懐疑論や、そもそも観念の世界がすべてなのだと思える立場（唯心論や物質否定論）に至る可能性がある。そのような思想が実践的に持つ意味を考えたとき、どんな問題点を持つだろうか。

それは、自分に見えている世界は物質的世界のように見えはするが、本当の実在性を持たない、つまりリアリティを持たない、とする見方であるから、物質（と見える）世界の意義を軽視し、物質的世界での生の意義を重要なものと見ない態度と結びつく。もしもこのような「見かけ」の世界のほかに本当の実在の世界というものがある、それも非物質的な世界があるという考えがこれを動機づけているならば、それは現世を彼岸に従属させる宗教的な信念となるだろう。その彼岸は「神の国」であっても「悠久の大義」などといったものでもよいが、いずれにせよそのような見たこともないもののためにこの世での生を犠牲にして（あるいは堪え忍んで）よいとする態度である。他方、「見かけ」の世界以外に本当の実在の世界を認めない場合、ないしそのようなものを知りえないとする場合（認識論における懐疑論）には、単純にこの世での生に意義を認めない態度、ニヒリズムとなるだろう。いずれにしても、「どうせこの世は幻」である。

「どうせこの世は幻」という考えは、生き方として見た場合、何を意味するか。それは、自分が生きていることをさして重要と考へないということである。仮に苦しくなく死ぬるとすれば、自分が死ぬということを何か根本的に惜しいことであるとは感じない、そのような精神状態であるとも言える。つまり、「どうせ人生は幻」である。「この世は幻」という思想を「存在のニヒリズム」、「人生は幻」という思想を「価値のニヒリズム」と呼ぶことができようが<sup>4</sup>、「存在

のニヒリズム」と「価値のニヒリズム」は、生き方の態度として見れば同じものに行き着く。

これと対比して見たとき、実在論とはどのような態度を意味するであろうか。自分の命を重要とみなす態度であるということになるだろう。命に執着し、それに基づいて行動するとき、人は間違いなく実在論者である。逆に、人が「この世も人生も幻のようだなあ」と思うのは、行動の必要を一瞬はなれて、自分のやっていることを傍観的に眺めたときであろう。次のような小話は、その奇妙さを通してこうしたことを教えてくれていると言えまいか。

あるインドの哲学者が「いっさいは幻である」という説を唱えていたという。すると王様がその哲学者を宮廷に呼び、いたづらをした。大きな象を哲学者に向けてけしかけたのである。哲学者は悲鳴をあげて逃げ惑う。王様はそれを見て笑いながら言う。「おまえはいつも、すべては幻だと言っているではないか。ならばその象も幻であるはず。なのに、なぜおまえは逃げるのだ。」すると、柱の影に隠れてふるえていた哲学者はこう答えたという。「おそれながら王様、あなたは私が逃げているとおっしゃいますが、逃げているように見える私もまた幻なのです。」<sup>5</sup>

この「哲学者」の言い分の異様な点は、身の回りで見えているもののみならず自分自身をも幻だと言っている点であり、また、そう言いながら、行動においては、自分の命を慮って真剣に象から逃げているという点である。逃げる哲学者が幻であるというのが「王様にとって」だけでなく当の哲学者自身にとってもそうだという意味なのなら、その言葉を彼の行動が裏切っている。そして、命の危険を前に当事者として行動する自分自身について、あたかもスクリーン上の映画を観てでもいる人のように語っている、その点にかろうじて「幻」論者としての面目を保っているように見えるのだが、当事者で

あるまさにそのときにそのような語り果たして可能であるか、小話を聞く人は首をかしげるのである。哲学者の言い分は確かに頓知を含んでいるが、やはり「幻」説を当人の生き方として首尾一貫させるのであれば、彼は命を失うことをおそれるべきではなかっただろう。

つまり、口で何と言おうと逃げるという行動の当事者である時、彼は象の存在にリアリティを認めている実在論者なのであり、実在論を生きている。そう思われるからこそ、われわれはこの哲学者の言動に、滑稽さと違和感を覚えるのである。

デカルトが「我思う、我あり」のみを唯一確実な事柄として確保し、それ以外を疑いの中に投げ込んでいたとき、観念論と呼んでよい状態にあったわけだが、その状態を抜け出して感覚に一定の信頼性を見出す際、重要なポイントとなっているのが身体と生命の保存の必要性であったのも、この次第をよく示している<sup>6</sup>。生きるために行動することがもはや意味も持たなくなったならば、そのような人こそは確かに観念論に陥っていると言えよう。

### 3-2 命の哲学としての唯物論

実在論と親近性のある唯物論も当然、生命の維持を重要とみなす態度を根幹としている。時々、新宗教のパンフレットなどに「現代の唯物論の傾向が命を軽視する風潮を生み出している」などと書かれていることがあるが、「唯物論＝生命軽視」という等式がその根底にあるのだとしたらそれは正しくない。本当に実在論的な唯物論ならば、それはむしろ「命の哲学」であるはずなのである。物質的実体の実在性を認めるということは、自己の身体と生命を重要と考える態度をその根本としているのだから。大きな岩が転がってきても苦痛や落命を厭わないのであれば、岩に押しつぶされる場所にとどまっ

ていてもよいはずである。苦痛や落命を心底恐れるからこそ、言い換えれば命を大事だと思うからこそ、岩の存在を本心から認め、岩による害を避けるのである。

また、物質の存在を真剣に認めるだけでなく、物質の法則を尊重し、これに従うのも、元来は命を重視すればこそである。薬の量を間違えたら、重い副作用で苦しむかもしれないだろう。だから、安全な量の決定と遵守が必要なのである。インパール作戦で英印軍と戦った日本軍兵士の死者は6万人であったが、そのうち4万人は餓死とマラリヤによるものだったという。これに対して、イギリス軍当局は戦地の地形と衛生状態について情報を収集し、補給ラインを確保しつつマラリアの薬を兵士に携行させたおかげで、餓死、病死を避けることができた。その根底には、少なくとも日本軍よりは人命を尊重する思想（それには戦闘を遂行する上で必要であったという理由ももちろんあるが）、そして、方法において精神論に陥らないという姿勢があったと言える。

逆説的に響くかもしれないが、唯物論 materialism とは本来、命のこの上ない重要性を認め、そこを基本とする思想なのである。フォイエエルバッハが「唯物論の故郷は医学である」と言ったのは正しい（『唯心論と唯物論』岩波文庫、123頁）。

ところが、唯物論がその「故郷」であり「根源」である医学的動機から離れていくとき、命の軽視につながることも確かである。後に述べる「左翼の観念論」の一類型となろうが、「所詮、人間は物質の塊」という発想がそれだ。物質の塊であることを無視しては人間の悩みを解決することはできないが、「物質の塊でしかない」と考えるようになったとき「命を軽視する風潮を生む」ことになる。どうせ自分や他人を構成している原子が散り散りになってゆくだけのこと

だからである。唯物論がこのような思想を意味するとすれば、それは「どうせ人生は幻」という観念論的態度と何と似ていることか。「どうせ人間は物質の塊」という思想と、「どうせ人生(この世)は幻」という思想とは、奇妙に一致するのだ。主観の内に現実を解消することと、客観のために主観を否定することとがともに観念論になるという仕組みが、ここからも分かるだろう。

#### 4 右翼の観念論(2)——合理的思考の欠落

さて、命の重視が實在論を構成する重要な要素であることを確認したが、これは實在論的態度の基礎をなす動機でしかない。命を重視するとか命に執着するというだけで観念論を逃れて實在論者になったと単純に言うことはできない。命を惜しみ、危険が迫ればこれを回避する人でも、やはり観念論に陥りうるだろう。たとえば、「この御守りを持っていれば事故に遭わない」とか、「このお経を唱えていれば山賊に出会っても切り殺されない」、「××式体操をやっていて免疫力がついているから、無理をしても大丈夫」とか。これらは自分の思い込みという幻影の中に閉じこもっているという意味で、現実を「主観性」の中に解消している。誤謬の可能性に目を向けていないのである。

##### 4-1 目的論的思考

観念論と實在論をめぐる哲学上の議論を分かりにくくしているのは、そもそも「観念」や「表象」とは何を意味するのか、そして、「観念の世界」つまり「私(場合によっては我々)の心の中」とは何を意味するのか、という点が明らかでないことである。この点に対して、「心は物質とは異なる存在なのか、それとも結局物質に還

元されてしまうのか」といった存在論的な問題意識からアプローチすると、混迷は深まり、実践的場面から遠ざかるばかりである。あくまで認識論に踏みとどまって「心の中」と「心の外」の意味を明確にしようと思うならば、「誤謬」という概念に即して行うのが実際に即している。

次のような例を考えてみよう。運動不足が原因で「頭が重い」とか「不調だ」と感じているとする。しかし、不調であるから安静にして寝ていたい、と勘違いすることは、運動不足が慢性化して感覚が歪んでいる人にはよくあるものである。この場合、不調の感覚に対して無批判に同意して「休むことが必要な状態」と思ったら、それは「私の心の中」にとどまるのであり、他方、考えた上での仮説や、他人の助言、もの本などに従って運動してみたところ調子がよくなったという場合、「私の心の外」へ出ることに成功したと言うことができる。つまり、現状に関するある種の判断・解釈が誤りと判明するということが、「私の心の中」と「私の心の外」を区別することに意味を与えているのである。

もちろん、何らかの結果が出たからといって絶対的な真理に達したという保証を手にするわけではない。しかし、それは少なくとも一歩「外に出た」ことのしるしである。實在論の擁護とは「心の外の世界」の存在を証明することであるとか、「われわれはマッドサイエンティストによってバーチャルリアリティを体験させる装置につながれた『培養層の中の脳』にすぎない」という仮説に反論したりすることだと、哲学の「専門家」の間では考えられて来た。けれども本当は、自身の誤謬の可能性を真面目に考え、「内」から「外」へ出る方法を追求している点でこそ人は實在論者なのである。

そうだとすると、観念論者とはどういう人を指すことになるだろうか。「人(びと)が自分(たち)の観念の世界にいる」とは、誤謬と判明し

うような思い (belief) にとどまり、検証する必要を認めず、場合によっては反証を前にしても自分の思いに踏みとどまること、であろう<sup>7</sup>。そのような人が人生において何らかの問題に遭遇し、改善を図ろうと欲するときにとる態度は、ウィッシュフル・シンキング、目的論などの形態をとることだろう。

目的論とは、現実はある定められた方向（ゴール）に向かって進行している、とする見方である。そして、その「目的」なるものは大抵、ある人々やある個人の願望や理想である。哲学史上におけるそうした思想の典型はヘーゲルの観念論であろう。歴史を普遍的理性の自己実現の過程と見るという思考方式がそれである。われわれのよく行うウィッシュフル・シンキングも、明確な自覚のない目的論であると言える。この思考方法の問題点は、「実現するという保証はどこにあるのか」、「実現しなかった場合にはどうするのか」といった点の検討を怠るところにある。その欠落は、信念、願望、祈り、精神力への期待、考えないことにする、といった態度で埋め合わされるほかない。またインパル作戦を例にとるが、参謀たちはこの難しい作戦を3週間で片付けられるものと考え、そうならなかった場合を考慮して補給を確保する措置を講じなかったということだ。

こうした思考様式や態度の対極にあるものが、理性による合理的な思考、本来の意味での思考である。観念論を避ける上でそれがもつ意味を考えるために、少し回り道になるが「観念論」の悪評を被ってきたバークリの思想の問題点を検討してみよう。

#### 4-2 バークリの物質否定論（非物質論）

近代ヨーロッパの哲学者のうち、「悪しき」観念論の典型とみなされてきたのはバークリである。物質の存在を否定し、主観のうちに現実を

解消したとされる。しかし、バークリ自身は自分の立場を観念論と呼んだわけではないし、常識的な実在論を認めてさえいる。では、バークリ哲学に悪い意味で観念論と呼ばれうるような問題点はないのだろうか。私は「ある」と考えている。そして、彼の唱える非物質論を観念論たらしめている要因は、彼が理性の力を適切に認めることができなかったことである。

バークリの『人知原理論』(1710) は、物質的実体の存在を否定することを目的としている。といて、目の前のテーブルやリングが本当は存在しない、と主張しているわけではない。それらは確かに存在していると認められている。ただ、存在するということが、哲学者たちによって正しく捉えられていない、とバークリは言うのである。彼によれば、事物とは、われわれが感じることのできる様々な性質の寄り集まったものである。たとえば、目の前に燭台があるとすれば、それは「銀色に光って見える」とか「細長い」とか、「叩くと固くてコツコツ音がする」とか、いった性質の集合体にほかならない。このようなものが「存在する」とは、「私」の知覚するさまざまな内容があるということであり、知覚内容は「私の心」の中にあるのだから、燭台のような事物は「私の心の中の観念である」とされるのである。この考え方は「存在するとは知覚されることである」という有名なテーゼにまとめられる。

彼が自説を擁護する議論のうち大事なものを簡単に言い直せば、次のようになる。事物が知覚とは別にあるとすると、知覚とは別のその事物の存在を確かめねばならないわけだが、事物の存在を確かめるのは知覚によって以外ではありえない。バークリ自身の例ではないが、たとえを用いてみよう。ヘビがいると思ったのだが、よく見てみたら紐だったという経験を考えてみるといい。「ヘビに見える」という自分の知



覚が真実かどうかを確かめる際、やはり知覚によっている。このように、事物の存在を確かめるのは知覚によるほかないのだから、存在するとは知覚することであると言うべきではないのか、ということである。人は、自分自身の知覚の外に出ることはできない。

こうして、存在するとは「私の心の中にある」ことだとされるわけだが、だからといって、パークリは「私」の好き勝手な空想がそのまま現実であると主張するわけではない。「事物(=観念)の世界は規則性に支配されている」と認めている点で、彼は常識に忠実である。非物質論は砂に顔を埋めるダチョウとは確かに違う。パークリの目から見ても、祈ったからといって雨が降るわけではないし、燭台で殴られれば、「自分は傷つかないぞ」といくら思い込んでもやはり傷つくのである。こうして、常識が言う「実在」をそのまま認めている、と主張する権利を自分は持つとパークリは信じる。そして、「観念を飲み食いする」とか「観念を着る」という言い方が耳障りに響くというのであれば、常識に従って「物を飲食し、物を着る」という言い方をすることになんら異存はない、とこのカトリックの僧正は言うのである(『人知原理論』38節)。

けれども、事物を飲み食いし、着ているのか、それとも観念を飲み食いし、着ているのか、どちらの言い方でもかまわないと本当に言えるだろうか。少なくとも言い方を変えた時どのように生き方が変わるかを検討してみるべきである。事実、パークリは「本当は物質的実体はない」と言うことで人々の生き方を変えようと企図しているのである。つまり物質世界への執着を戒め、神に目を向けるようにと。決して常識人の生き方をそのまま肯定する思想ではないのであり、このような二枚舌がある。

もっとも、物質や生命に執着しないというこ

とからただちに悪しき観念論であるということになるわけではない。というのは、実在論には次のように矛盾したところがあるからである。自分が生きていることを大事と思う態度が実在論の出発点であると先に述べた。だが、衣食がそこそそ足りているが「何のために生きるか」が見出せない、「ただ単に生きていればいい」という人生観の人は、前節で述べたニヒリズムに奇妙に似通っている。他方、人生を捧げる対象があり、やるに値する活動があるから自分の生きていることは大事であるとする人もいる。そういう人にとっては、単に命を維持することが大事なのではない。場合によっては命を危険に晒したり、寿命を縮めるようなこともするだろう。命の尊重は実在論の条件であるにも関わらず、それだけでは実在論になりそこねる可能性があり、逆にまた、実在論者(人生に価値を認めている人)が命の尊重という自らの前提を相対化していることもある。人間にはこのような奇妙な矛盾がある。それゆえ、「命の軽視が観念論である」という前節での私の主張は、無条件的なものではないのである。

いずれにせよ、物質への執着を究極目的としないということから直ちに悪しき観念論が帰結するわけではない。パークリの場合もその思想を観念論たらしめている点は、非物質論それ自体よりも、既に示唆したように、思い込みを脱する道を適切に提示しえていない点にあると思われる。

#### 4-3 パークリの問題点——「観念」ではなく「概念」を持つことが必要である

パークリの言う「観念」は感覚、ならびに想像や想起に現れるイメージを指している。彼は、われわれの意識がもつ認識的機能をもつばら「感覚」や「イメージ」の獲得・保持にあるとみなしているのである。しかし、感覚やイメー

ジを無反省に肯定するなら、「思い」の世界を脱することはできないだろう。もちろん、彼は理性による反省・推理の働きがあることを認めてはいるし、それによって、感覚が与える「見かけ」に惑わされないようにすることができることを認めている（後出、5-2を参照）。けれども、理性を行使するとはどのようなことかに対する洞察が、やはり欠落していると言わねばならない。その欠点が彼の有名な「唯名論」に表れている、と私は見るのである。

よく知られているように、パークリは、具体的にイメージできるもののみを「観念」と呼び、抽象的で一般的な観念なるものを認めない。人がイメージする三角形は常に鋭角であるか直角であるか鈍角であるかなのであって、それらのいずれでもないような「三角形一般」を思い描くことはできない、と。従って、「三角形」という言葉をわれわれが使うにしても、それは三角形一般という抽象観念に対する記号となっているのではなく、あくまで個々の具体的で、何らかの角度や長さをもった三角形を代表する記号として働いているというのである。（抽象一般観念などなく、あるのは一般的名称のみとする「唯名論」。）しかし、このような認識観と言語観は、いかにしてわれわれが個々の事例をある一般的なものの適切な事例として再認し、また再現することができるのかという問題を不問に付してしまっている。三角形一般なるものを像としてイメージすることができないのは確かである。しかし、われわれは三角形とは何であるかを知っているから、つまり三角形の本質的諸要素を知っているから、様々な三角形の像に接したときにそれを三角形として再認することができるのであり、また、三角形について何かを論理的に証明することができるのである。これは、三角形のイメージを持っているということではなく、ドイツの哲学者たちの語法を念頭に置いて

言えば、三角形の「概念」を持っているということだ<sup>8</sup>。

「観念」（ここでは感覚やイメージを指す）を持つことと「概念」を持つこととの違いの重要性を、私自身の経験をもとに示してみたい。無骨なやり方ではあるが、「自分の心の外に出る」ことがいかに難しいかを確認し、認識論というものの実践上の難しさを確認する上で、このようなアプローチも必要かと考える。

私は陳式太極拳という武術を学んでいる。この武術においては、大きな力を用いずに相手のバランスを崩して投げるということが中心的な要素の一つとなっている。その練習に際して、「投げる」とはどういうことかを感覚やイメージに頼ってつかもうとすることは大きな閉塞に入り込むもとである。なぜなら、子供の頃の学校体育の経験、現代人としての日常的な所作の習慣、そして自分個人の悪い習慣、これが「投げ」について誤った感覚とイメージを作ってしまったからである。その誤ったイメージに引きずられて私がよく犯す失敗は、「相手を持ち上げる」「持ち上げるために足をふんばる」「肘を上げる」である。これは、求められている「投げ」ではない。相手のバランスを崩して「浮かす」のだと先生は言うが、私の方は、「相手が浮かす」ということはこちらは持ち上げるのだ、と思いついてしまう。時々うまくいったとしても、古い感覚を引きずりながらそれを再現しようとするので、ただだめになる。たくさん試してみることが大事だが、方針なく試しても進歩がないことを痛感するのである。

つまるところ、「何となく違う」ではなく、「全然性質が違う、なぜならば」と言えることを目指さないと、再現性を得ることができないのだ。イメージは補助手段として役立つこともあるが、必要なことは新しい「投げ」について適切な概念を作るための工夫をすることであり、そのた

めに必要なのが論理である。たとえば、Aをやった時との結果と、それと違うA'をやった時の結果とを比べる必要があるわけだが、その際、AとA'はどこが違うのかを自覚していないといけな。さもないと、何度試みても博打を打っているのと変わりが無いであろう。このような論理性ある試行錯誤によって、新しい「投げ」を古い「投げ」と厳然と識別できるよう工夫する。また、たまたまうまく行った場合と行かなかった場合を比較し、分類する。分類するにあたっては、AとA'が対立概念であることを自覚するといった、構造的な発想を持つことが必要である。こうして、古い「投げ」と新しい「投げ」それぞれの可能性の条件を思考において指定する。このような作業が概念化である。概念化を目指して実験、観察することがなければ、「私の外」に出ることはおぼつかない。これは単なるイメージの蓄積とは異なる作業である。

パークリとは異なり、デカルトは「心の外」に「出る」方法を具体的に追求することが出来た。それは結局、「われ思う」の作用がイメージや感覚の獲得だけでなく、理性による思考の可能性をも含んでいるということを見えていたからである。理性による思考のおかげで「私」は感覚や習慣に翻弄されるだけではない、本来の意味での認識の「主体」と言えるということを知っていたのだ<sup>9</sup>。

## 5 左翼の観念論

さて、宗教を退けて此岸にとどまり、かつ合理的・科学的な概念や理論でもって此岸の現実と向き合っているつもりでも、観念論に陥っていないという保証はない。問題は「科学的」諸概念の使用の仕方にかかっているからである。サルトルは言っている。「右翼の観念論はその諸概念の内容によって観念論と呼ぶにふさわしい

が、左翼のそれは今日それがその諸概念を駆使しているその使用の仕方によってその名にふさわしい。」(『方法の問題』383頁)前節で見たように、内から外へ一歩でも「出る」ための思考が実在論なのであって、もう「出た」から自分は不動の客観性の中に立っていると思うところに、思い込みへの下り坂が待ち受けているのである。これが「主観性の否定」から生まれる観念論であり、この論文でも便宜上「左翼の観念論」と呼んでおいたものである。その特徴は第一に、科学的な概念や理論(といっても結局は仮説でしかない)の硬直化した使用、そして第二に、そもそもその概念や理論の意味を自分で考えようとしないうこと、にまとめられると思われる。

### 5-1 概念や理論の硬直化した適用

概念を、それが当てはまらないうかもしれない場面まで含めて無差別に適用するならば、これは既に盲信である。身近なところでは、健康食品との付き合い方でこういう盲信はよく起こる。玄米はビタミン類を豊富に含んでいるから体によいと言って、季節や体調の違いによる適・不適を知ろうとしないまま食べ続けるなどである。それでは「玄米教」の信者だ。また、遺伝子に人間の資質が規定されているのは確かとしても、将来の可能性を作り出す要因としてはそれがすべてではない。だから、あるノーベル賞物理学者の教育に関する次のような短絡的発言は、科学的に現実を見ているというより、自分が「科学」だと思い込んだものに現実の方を合致させようとしていると言った方がよいのだ。曰く、「ある種の能力が備わっていない者が、いくらやってもねえ。いずれは就学時に遺伝子検査を行って、それぞれの遺伝情報に見合った教育をしていく形になっていきますよ」<sup>10</sup>。

社会科学の概念や理論に関しても適用の仕方

が問題になるのは当然で、サルトルが「マルクス主義的観念論」と呼ぶものは、社会と歴史を見る際の「図式」が硬直した典型例である。たとえば、ブルジョアとプロレタリアの階級闘争という観点からしか見ない教条主義的なマルクス主義者にとっては、1848年のドイツの革命の歴史記述は「共和主義的プチ・ブルがその盟友であるプロレタリアートを裏切った」という宣言で終わるだろう（380頁）。また『エスプリ』誌の医学特集号に対してあるフランス共産党員が行った批判も、サルトルに言わせると図式の硬直化の好例である。すなわち、患者と医者の人間的関係に拘泥するのではなく、肉体労働者（患者）と頭脳労働者（医者）との潜在的対立や医者間の経済的競争の見地から分析してこそ現実を見たことになる、と件の批判者は言う。しかし、「唯物論的」「社会科学的」視点の重要性にも関わらず、苦痛に関して救いを求めるものと求められているものとの個人対個人の関係について語ることは、医療の現実と向き合う場合に消去できない視点である、とサルトルは反論するのである。

硬直化した図式は、現実がそれに合致しないと判明するや、現実のもつ特殊性の方を断罪しさえする。経済計画に合致しない現実（生産者や、場合によっては自然的条件さえも）が非難の対象になるのである。ブダペストの地下鉄工事の停滞を前にしたハンガリーの指導者の態度にサルトルはそのような倣岸さを見た。

以上と比べると、ナイチンゲールの『看護覚え書』という書物は、逆に、硬直化した思考を戒める教訓に満ちている。悪しき観念論の対極にある「真の実在論」の見本であると私は考えるのである。たとえば、病人を看護するにあたり、滋養のあるものを定刻に食事として出しておけばよいという態度が、そこでは甚だしい怠慢として警告の対象となっている。その怠慢と

は、自分が問題に取り組む当事者であることを忘れることである。

「病人を注意深く観察している人であれば誰もが同意してくれると思うが、毎年何千人という患者が、食物が豊富にありながら餓死させられている。それは、患者が食物を摂れるようにする方法についての注意の向け方が不足しているからである。このような注意不足は、病人に不可能なことを強いている人びとの側にも、自分に可能なことを努力しようとしめない病人自身の側にも、明らかにみられるのである。たとえば、衰弱のはげしい患者の大部分にとっては、午前11時以前に固形物を摂ることは不可能にちかい。まして絶食状態がつづいていて体力がいっそう弱っている場合には、11時以前には絶対に食べられない。・・・それなのに、患者の朝食に羊肉の厚切り一切れと卵一個にベーコンの指示があった、などとよく耳にするが、そんなものを（ちょっと考えれば分かることであるが）そんな時刻に患者が咀嚼できるわけがない。・・・一方、医師の簡単な質問によって患者の生命が救われた例がある。その患者はあまり食べられないために衰弱しつづけていたのであるが、医師が「それにしても、食べられそうな気のする時間は全然ないのですか？」と聞くと、「いえ、あるんです。〇時と〇時ならいつでも食べられます」と答えた。そして、そのとおりにしてみたら、まさしく成功した。しかしながら、こんなことがいえる患者はきわめて稀である。いつなら患者が食べられるか、よく観察してその時刻をつきとめること、それはあなた方の任務である。」（『ナイチンゲール著作集1』現代社、249-250

「あなた方の任務である」という最後の言葉に表れているように、現実を相手にするという事は、「今」「ここで」「この私」が観察し、実験し（患者に問いかけ）、考えるということである。現実はそのつど特殊なものだからである。また、現実は常に変化している。自分が一度得たと思った真理、過去の成功経験も、それに盲従する限り信仰と同じものになってしまう。

「ある患者は一月前にはひとりで風呂から出られた——、またある患者は一週間前には呼び鈴のところまで歩いていった——、故に今でも患者はそれをできる、と看護婦は思い込んでいる。彼女は患者の変化をまったく観察していない。その結果、消耗のために身動きもできぬ状態で放置された患者は、偶然に誰かが入って来るまで、途方に暮れていることになる。・・・さらにまた、いつもはベッドに寝たきりでなくてもよかった患者が、下痢や嘔吐あるいはそのほか何かの変化が生じて数日間就床を余儀なくされたとする。そしてやっと起き上がったばかりの時に、看護婦は患者が別の部屋へ行くことを許可してしまい、しかも二、三分後に様子を見に行ったりもしない。この看護婦は、そんなことをすれば彼は必ず気分が悪くなったり、冷え込んだり、あるいはそのほか何か事が起こるにちがいないということ、まるで思いもしない。彼女は、「つききりで気を揉まれるのを彼が厭がるからです」と弁解する。確かに、何週間か前には彼はそう言ったかもしれない。しかし彼は、いまのような状態にあるときに「つききりで気を揉まれる」のが厭だと言ったわけではない。」(337

ナイチンゲールの観察力も驚嘆に値するが、それと同時に、論理性とは特殊性や変化を念頭に置いた、あくまで現実を捉えるための思考方法であることをこの引用箇所は教えてくれるのである。<sup>11</sup>

## 5-2 概念や理論の意味を知ろうとしない

科学が实在論の支えとなるためには、専門家集団の研究が充実し、それが人々を啓蒙するというだけではなく、「私」自身において科学的態度が実現するのではなければならない。これが前項で得られた教訓である。このようになっていないとき、「私」は「科学教」や「マルクス教」の信者になっているわけである。信者による概念の適用が硬直化するのは当然のことで、自分の用いている概念や理論の元来の意味を知り、自分自身で検証しようという態度が欠けているからだ。いくら専門家集団が科学をやってくれていても、その「恩恵」にあずかる一方である間は、「私」は一人の未開人にすぎないのである。

たとえば、パークリは、月は知覚されたものとしてはあくまで小さな円盤であることに、注意を促している。月が見かけとは違って巨大な球体であることを人が知るのには理性による推論によってである。だから、月をおよそ直径1フィートほどの平らで輝く円盤と見る人は、(知覚においては間違っていないが)推論において間違っているというのである(『ハイラスとフィロナスの三つの対話』岩波文庫、176頁)。それはその通りなのだが、私自身はというと、月が見かけよりはるかに大きいということを、観察可能な事柄に照らして自分で推論し直して見たことがない。だから、実はパークリの言う「知覚されているもの」の世界、つまり「私の心の中」にいるのであり、月が衛星であると知識によっ

て学んだにしても、自分の理性によってその知識を自分のものにしたわけではないのである。恐ろしいことだが、他人たちが理性を使ってくれたので自分は理性を使わなくてもいいと思っているのだ。それでいて理性の時代の人間であると自分では思っているのである。もちろん、すべての科学的知識を自分で検証すべきだというのではない。しかし、解決したい問題を前にしたとき、自分が用いようとしている概念や理論の意味や由来へ遡及することは避けられない作業だろう。

晩年のフッサールが時代の風潮に抗して強調していたのはそのような作業の必要性であり、それも、学問的諸概念のもともとの意味が見えにくくなったために一層重要な課題となっているということだった。

「基本的諸概念の意味形成の生き生きした伝承が現実にとどかなさされているかは、幾何学の初等教育とその教科書を見ればわかる。われわれが実際そこで学ぶのは、既成の諸概念と諸命題を厳密な方法論に従って操作することである。…それ以上のことは、成果さえあればそれでよい。」  
(フッサール『幾何学の起源』青土社、282-283頁)

幾何学を始めとする諸科学の概念の、元来の「意味形成」の場面からわれわれは疎遠になり、「既成の」諸概念の操作を習得するだけの存在になっているというのである。つまり、それだけわれわれは未開人に転落する危険にさらされているということだ。成果としての「科学的知識」が存在することと、「私が科学すること」とは別のことだからである。そして、フッサールの言うように諸概念の起源に立ち戻ることが重要なのだとすれば、それは、そもそも事象を概

念化・理論化するということがどういうことかを、個々の「私」が学びうるようにするためであろう。

理性による思考の諸形式を探究したデカルトやカント、フッサールといった人々の問題意識は、このように「私自身」が現実と向き合うときの意識の態度を明らかにしようとしたものだったとすることができる。彼らの仕事は、二十世紀においては、何か独断的で、時代に合わない尊大な企てであると評価されることが多かった。何しろ、科学の基礎づけを哲学がやらねばならぬ、とこれらの哲学者たちは考えていたのだから。しかし、これが尊大な企てに見えるということは、「科学」を専門家集団が積み上げる知識の蓄積とのみ見なし、決して各人の「科学する」活動とは考えなくなってしまったという病的状況の表れであろう。理学博士でも工学博士でもない自分が今さら身の回りの現象について観察、概念化し、その「可能性の条件」を追求するといったことをやる必要はないのだという人生観が、人をして、そうした「基礎づけ」の企てを不可能かつ不要だと言わしめるのである。つまり、求められているのは、正確には、「科学」の基礎づけというよりも「科学する態度」の基礎を明らかにすることなのだ。

最後に、観念論の特徴をまとめてみよう。「右翼の観念論」は、現実を主観性の内に解消し、すべてを「私」の世界と妄想することである。他方、「左翼の観念論」は、「私」が考え観察することがないまま科学の「成果」と言われているものを妄信する。「私がすべて」でも「私が不在」でも、自分と対峙する世界の实在性を真に認めていることにならない。これはなぜかという、いずれの場合にも思考というものが欠けているからである。思考ではなくて自分の願望や思いに従っている場合には「私がすべて」ということになろうし、自分で考えることなしに

専門家の権威にただひれ伏している場合には「私が不在」ということになる。そして、いずれの状態も、直面している現実問題を解決するのではなく、問題の解消を自分に宣言するという特徴的態度と結びついていることが分かる。してみると、実在論とは、これらとは逆に、「問題が存在している」と認識していること、そして、「問題の解消ではなく解決に」集中すること、これらを要件とするのだと言うことができよう。

#### <注>

- 1 これはパースの提起したプラグマティズムの格律である。すなわち、ある概念・思想の意味を理解するためには、その概念・思想が人の行動にどのような変容をもたらすか、それを観察することが必要であるということだ。言うまでもなく、この格律を後のプラグマティストたちの「どの理論、体系を取るかは、役に立ち、便利であるかによって決せられる」という類の指針と混同してはならない。
- 2 ということは、「神」とは実際には、客観性と妄想された主観性であるということだ。そうでなければ、自分の視点の有限性を自覚する上で方便であった。
- 3 サルトル『方法の問題』、『世界の大思想29 サルトル』河出書房、386-387頁、383頁。なお、私は「現実を主観性のうちに解消する」観念論を「右翼の観念論」、「客観性のために一切の主観性を否定すること」を「左翼の観念論」とここで呼ぼうとしているわけだが、サルトルのテキストがこの通りの対応づけを提示しているわけではない。サルトルは「主観性オンリー」のタイプの観念論をレーニンのあるテキストに、「主観性否定」の観念論をマルクスのあるテキストに関連づけている。しかし、レーニンの、「意識は存在の反映にすぎず、最もましな場合でも近似的に精確な反映にすぎない」(『唯物論と経験批判論』)という断定がヒューム流の懐疑論と同じものになってしまう、というサルトルの診断を考慮するならば、「主観性オンリー」の観念論がマルクス主義以前の観念論(右翼の観念論)をも指しうること、というよりもむしろそれをこそ元来指すことは明らかである。
- 4 ニヒリズムにいろいろな対象がありうることに ついて、渋谷治美『逆説のニヒリズム』(花伝社、1994年、69頁)を参考にした。
- 5 この小話は、中島義道が山本信から聞いた話として報告し、論評しているが(中島義道『時間と自由――

カント解釈の冒険』晃洋書房、1994年、237頁)、私もかつて山本信の放送大学講義『哲学の基礎』で聞いたことがある。

- 6 デカルト『省察』の「第六省察」。
- 7 してみると「心」とは、意識における「行動や考え方を変えたくない、変えまい」という働きのことであろう。
- 8 「概念」にあたるドイツ語はBegriffで、それはbegreifen(把握する、つかむ)から来ている。イメージや感覚を持つという受動的な心的作用とは異なるものである。
- 9 ここまでのところで私が「論理」と言ったのは、伝統的形式論理学や現代の数理論理学(形式的体系として構築された人工物としての)のことではない。デカルトやロックは伝統的形式論理学の三段論法が認識の獲得の役に立たないことを早くから述べている(デカルト『精神指導の規則』「規則10」、ロック『人間知性論』第4巻第17章)。フッサールも、「生活世界のア・プリオリ」による基礎付けを欠いている間は、論理学は根拠なく宙に漂ったままであると言っている(『ヨーロッパの学問の危機と超越論的現象学』36節)。
- 10 江崎玲於奈氏の発言として知られている。ジャーナリストの斎藤貴男氏のインタビューに答えたもの。斎藤貴男『機会不平等』、文春文庫、2004年、16頁。
- 11 ナイチンゲールは神を信じていたのではないか、それなら彼女は「右翼の観念論」に陥っているのではないか、という異論が出てくるかもしれない。また、一般に、神を信じているキリスト教徒やイスラム教徒が優れた科学的思考が出来たのはどうしてか、という疑問も生じて来よう。確かに、事は単純ではない。ここでは、神を信じるにしても、「神頼み」をする態度と、「神が創った自然法則を見出そうとする」態度という、異なった態度がありうるのだと述べておく。『看護覚書』に見られる「神」観は後者である。『神の御恵みによって』彼は回復するであろう」という、きまり文句がある。しかしこれでは、彼が回復しないとしても、それも神の御恵みによるということになる。・・・『神の御恵みにより彼は回復するだろう』、これは、健康あるいは回復をもたらすために神が定められた方法を、こともあろうにないがしろにして平気である人びとが、きまって口にする言葉なのである。』『ナイチンゲール著作集1』188頁) また、彼女はこうも言っている。「ところで看護については『神秘』などまったく存在しない。よい看護というものは、あらゆる病気に共通するこまごましたこと、およびひとりひとりの病人に固有のこまごましたことを観察すること、ただこの二つだけで成り立っているのである。」(335頁)